

# 紫式部の宮廷生活

## —源氏物語を通して伝えたかった事とは—

藤本 光穂

(山本 淳子ゼミ)

### 目次

- はじめに
- 第一章 紫式部の生涯
  - 第一節 『源氏物語』執筆時期について
  - 第二節 宮廷で女房になった経緯
- 第二章 紫式部の晩年
- 第三章 『源氏物語』に残したメッセージ
  - 第一節 葵の上の死と六条の御息所
  - 第二節 空蟬の揺るがない思い
  - 第三節 紫の上が思う女性の在り方とは
- おわりに

### はじめに

紫式部は、一条天皇の後、彰子に仕え、『源氏物語』の作者としても名を残した人物であるが、その生涯については謎が多く残されている。

例えば、生没年や本名、母親の没年などは明らかにされていない点がある。内裏に入り、女房として彰子に仕えたが、どのようにして内裏で働くことになったのか、藤原道長とはいつ知り合ったのかなど、宮廷生活以前の紫式部について着目してみると興味深いものがある。

私が紫式部の生涯について取り上げようと考えた理由は、紫式部について調査する中で彼女について不確定な部分が多く、その魅力に惹かれたからである。また、女房でありながら『源氏物語』を後世に残したその功績をより深く知りたいと考えたからである。

紫式部自身、出生はそれほど身分が高いわけではなかったため、幼少期を宮廷で過ごすことなどはなかった。それゆえ藤原家や天皇家と関わりを持ったことに疑問点がある。

雅で豪華な宮廷生活を想像されることが多いが、藤原道長や他の権力者との関係を見ると、幸せな

生活ばかりではなかったことが窺える。

『源氏物語』は、今日まで日本に留まらず、世界各国で最高の評価を受けており、舞台、ドラマ、アニメーション作品など多岐にわたって製作が行われている。『源氏物語』と言えば、男女関係が艶やかに書かれており、読むことを薦めないといった考えもあるが、その問題点以上に文学的、歴史的に価値のある物と考えたい。

紫式部は、一条天皇、彰子に仕えながら、『源氏物語』という恋愛長編作品を完成させている。これほどの作品を残すことができたのは異色と言って良いのではないだろうか。

『源氏物語』では、人の生き方や、女性の人生の在り方などを丁寧に書いている場面が多く見られる。恋愛が良い方向に行く展開よりも、恋人に先立たれたり、交際を断られたりするシーンが印象的である。ハッピーエンドよりも悲しい終わり方をする物語であると思う。

また、紫の上などの正妻の子ではない人物の苦労や、柏木のように結婚が上手くいかない人物もいる。このような作品構成は、紫式部自身の思いなのか、または経験からくるものなのかについても考察すると興味深いと考えている。

以上を踏まえて本稿では、紫式部の宮廷生活の不明点について考察したい。また、紫式部が残した『源氏物語』のメッセージとはどのようなものなのか取り上げる。

### 第一章 紫式部の生涯

#### 第一節 『源氏物語』の執筆時期について

まず、紫式部の生涯についておさえるために、年表(表1)を作成した。次のようなものである。表を作成するにあたって、(※)の参考文献を使用した。

(表1)

西 暦	事 項
973?	誕生 幼少期 漢文や歌集などの学習
996	父 越前に赴任 1、2年で帰京
998	宣孝と結婚
999	賢子を出産
1001 4月	宣孝 死去 この頃に『源氏物語』の作成を始めたか
1005 または 1006	彰子に仕える
1008	『紫式部日記』 彰子の皇子（後一条天皇）出産 を中心に書く
1010	『宇治十帖』執筆か 『紫式部日記』消息文執筆
1011 6月	一条天皇 崩御 崩御後も彰子に仕える
1013	彰子の下を去る？
1013	『紫式部集』を編集
1014～1019	彰子に仕えていたか不明
1019～1027	藤原実資と接触か

※今井源衛『人物叢書 新装版 紫式部』吉川弘文館、1966年3月30日  
倉本一宏『紫式部と藤原道長』講談社、2023年  
今井源衛「紫式部の晩年再考」『日本文学研究』18巻（1982.11）、13-24頁

上の（表1）を基に、紫式部がいつ『源氏物語』を執筆したのかを考える。

紫式部が『源氏物語』を執筆した時期は、夫宣孝の死後だと考えられている。倉本一宏氏は著書『紫式部と藤原道長』で、宣孝の死後、紫式部は友人同士で物語を作って見せあっていたとしている。また、この物語が直接的に『源氏物語』に繋がっているかは不明であるとしている。だが、その不明点よりも、長い年月をかけて『源氏物語』の世界観を構成したと考えたいと述べている。

一方で、中野幸一氏は『新編 日本古典文学全

集 紫式部日記』で、長編物語作成には強力なサポートが必要であったとし、紫式部は夫の死後、小さい子供がいる状況で書く余裕がなかったのではないかとしている。

私はこの二つの説を考えただけで、倉本氏の論説を支持したい。中野氏は前述の通り、小さい子供がいる中、書く余裕はなかったとしているが、これは憶測だと思う。理由は次のようなものである。

まず、なぜこの点に違和感があるかという点、子供がいる女性は時間がないという考え方は、現代的だからである。今日では、子供の面倒を見るのは両親であり、食事や睡眠、入浴などの面倒を見ることは通常であるが、平安時代などの貴族社会では、子供の世話をするのは、乳母や女房が一般的であった。

そのため、母親が付きっきりで世話をすることはなく、現代とは育児の負担が違ってたと推測できる。紫式部も同様に、上流階級とは言えないまでも貴族であるため、女房達が子供の面倒を見ていたと言える。そのような理由から、子育てをしながらの執筆に無理があるという考え方は無根拠だと思う。

強力なサポートが必要であったという点では、執筆に使用する紙のコストや時間を考えても支持できる。

これらを踏まえたうえで、作成時期の不安定な状況を推測するよりも、倉本氏同様、長期間で作成したであろうという点を重視したい。

## 第二節 宮廷で女房になった経緯

紫式部について不明点をもう一つ挙げるとするならば、いつ藤原道長と接触し、彰子に仕えることになったのかという点である。

まず、『新編 日本古典文学全集 紫式部日記』を見ていきたい。同解説では、紫式部の従兄弟の藤原伊祐が中務宮具平親王の落胤を養子にしたとしている。また、紫式部の父、藤原為時が中務宮に出入りしていたため、このような点から親王家と関係があったとしている。

そして、紫式部自身も結婚した頃に中務宮に出入りしていたのではないかと考察されているが、彰子に仕える前に宮仕えをしていたという断定的なことは言えないと述べている。

さて、倉本一宏氏の著書『紫式部と源氏物語』では、次のように述べられている。

『今鏡』や『河海抄』では、紫式部が彰子の前に具平親王家や、源倫子の女房を務めていたという言い伝えがある。だが、真偽は明らかではなく、彰子に仕えはじめた際の戸惑いから考えると、彰子に仕えたのが初めての出仕ではないかと考察されている。

以上の二つの著書を比べて、私は、紫式部は(表1)のように、1005年または1006年に彰子に仕えたのが初めての出仕と考えたいと思う。理由としては、『紫式部日記』での様々なでき事から初めてではないかと考えた。

例えば、紫式部が他の女房をかなり細かく、良いところも悪いところも評価して書いている点や、彰子の出産やその他のお祝い事を丁寧に書いている点に着目する。やはり同僚の女房達の評価を日記にまで書いて考えていたということは、宮廷で働く女性が紫式部自身には刺激的であったのだと思う。初めて来た職場で、様々な性格の働く女性がいて、刺激的かつ緊張感があるというのは紫式部に関わらず、誰にでもあるということだと考えた。

彰子の出産などお祝い事も丁寧に書いたのは、自分が仕えた後の記録を残したいという気持ちもあったと思うが、日記に書くくらい、豪華でコストと体力を使ったでき事だったのではないと思う。

このような理由と考察から、私も紫式部は、彰子に仕えたのが初めての宮廷勤務であったと考える。

藤原道長とどのように知り合ったのかについては、父為時が越前の守などを務め、宮廷に出入りしていたため、自ずと娘である紫式部の存在も知られるようになったと見るのが自然ではないかと考察する。<sup>1</sup>

## 第二章 紫式部の晩年

紫式部は、いつ亡くなったのかが不明ではあるが、彰子の下を去ったと思われる時期についても記録が残されている。今井源衛氏は「紫式部の晩年再考」(『日本文学研究』1982)で次のようにまとめている。

まず、『小右記』において、藤原実資は1013年1月19日から年末にかけて、彰子を通じて道長に、

養子の資平の昇進を願い出ている。そして、確証はないが、ここから1014年8月20日までと、その後5年を経過した1019年正月5日に紫式部と思われる女房が小右記に登場する。この1019年1月5日には実資の給与関係の話があるが、道長、彰子、実資とのやり取りをした女房は紫式部と考えられる。理由としては、この時登場する女房は、対応能力の高さから見てベテランで彰子からも信頼され、実資とも長年関係があったと見ることが出来るからである。このように今井氏は論述されているが、それを踏まえたうえで、紫式部がどれくらい仕えていたのかを整理すると、(表1)の1014年から1019年は、生存しているが、空白の5年間ということになる。

では、1019年以降はどのように考えるべきだろうか。ここで倉本氏の説を見ていきたい。『紫式部と藤原道長』では1019年以降も藤原実資と接触していたとしている。具体的に、1027年、紫式部が55歳の頃までと年表を作成して、『小右記』にあるこのような取り次ぎの「女房」は、1014年以降にも1027年まで見える。それを紫式部と考えるなら、生存していたと推測することができるとしている。

私は倉本氏がこのように論述した理由を知るために、『撰関期古記録データベース』を使用した。『小右記』の中で1027年に「女房」という単語が出てくる記述を検索して、それが紫式部かどうかを判断したいと考えた。

まず、「女房」という単語が出てくる場面を次のようにまとめた。原文の漢文の書き下し文は、『撰関期古記録データベース』を参照し、現代語訳は倉本一宏氏の『現代語訳 小右記』を使用した。

[2 / 25]

二十五日、丙申。「東宮の御瘡病、昨日、発り給ふ」と云々。所労有りて参入せず。女房に触るべき由を、資高の許に仰せ遣はす。即ち来たりて云はく、「女房に伝へ示し了んぬ。即ち仰せ事有り。参るべき日を問はしめ給ふ」てへり。院、致行朝臣を以て、重ねて相撲使の仰せ有り。理有る者多き由を申さしむるも、承り従はず。又、初めの御使民部大輔方理朝臣を呼びて子細を申さしむ。両度、仰せ有る

に、差し遣はし了んぬ。今般に至りては、仰せ事を恐むと雖も、定め遣はすこと能はざる由なり。

夜に入りて右少弁家経、仁王会の事を申ししむ。人を以て伝へ申ししむ。

### 【現代語訳】

「東宮の御癪病は、昨日、発せられた」と云うことだ。病悩が有って、参入しなかった。女房に告げるよう、資高の許に仰せ遣わした。すぐに来て云ったことには、「女房に伝え示しておきました。すぐに仰せ事が有りました。参ることのできる日を問われました」ということだ。院（小一条院）が（藤原）致行朝臣を遣わして、重ねて相撲使の仰せが有った。道理の有る者が多いということを申させたが、承従しなかった。また、初めの御使である民部大輔（源）方理朝臣を呼んで、子細を申させた。両度、仰せが有ったので、差し遣わしておいた。今般については、仰せ事に恐縮しているとはいっても、定め遣わすことはできないとのことである。夜に入って、右少弁家経が、仁王会について申させた。人を介して伝え申させた。

### [2 / 28]

二十八日、己亥。頭弁、勘宣旨を持ち来たる。即ち覆奏せしむ。内に参りて陣に候ず。即ち宮に参る。大進懐信朝臣を以て女房に伝へて事の由を啓せしむ。仰せ事有り。小時くして罷り出づ。

頭弁重尹、勘宣旨〈大炊寮、申す右小史生。〉を持ち来たる。同弁を以て覆奏せしむ。即ち宣旨を下さる。

「内蔵寮の北垣の辺りに死人有り。雑人、之を見る。今朝、突き殺さる。則ち是れ法師の童子。同僚の所為」と云々。

「亥時ばかり、四条大路の北辺り、油小道の西頭、焼亡す。此の中、兵部卿親王の家、焼亡す」と云々。

### 【現代語訳】

頭弁が堪宣旨を持ってきた。すぐに覆奏させた。内裏に参って、陣座に伺候した。すぐに宮（敦良親王）に参った。東宮大進（源）懐信朝臣を介し

て、女房に伝えて事情を啓上させた。仰せ事が有った。しばらくして、退出した。

頭弁重尹が堪宣旨〈大炊寮が申請した右弁官史生。〉を持って来た。同じ弁を介して覆奏させた。すぐに宣旨を下された。

「内蔵寮の北垣の辺りに死体が有った。雑人がこれを見た。今朝、突き殺された。つまりこれは法師の童子である。同僚が行ったものである」と云うことだ。

「亥剋の頃、四条大路の北辺り、油小路の西頭が焼亡した。この中で、兵部卿親王（昭登親王）の家が焼亡した」と云うことだ。

### [4 / 20]

（中略）「左中弁経頼、賀茂祭の行事なり。而るに禊の日、俄かに障りを申して勤めず」と。経頼、密かに語りて云はく、「斎院、祭日に至りて犬の死穢有り。秘して斎王に申さず。経頼、長斎す。院に候ずる女房、密々に告げ送る所なり。仍りて故障を申す」てへり。

### 【現代語訳】

「左中弁経頼は、賀茂祭の行事でした。ところが、御禊の日、急に障りを申して、勤めませんでした。」と。経頼が密かに語って云ったことには、「斎院は、祭日に至って、犬の死穢が有りました。秘して斎王（選子内親王）に申しませんでした。私（経頼）は長斎を行っていました。斎院に伺候する女房が、密々に告げ送ってきたところです。そこで故障を申しました」ということだ。

### [7 / 19]

（中略）宰相中将、来たりて云はく、「関白に参謁し、資房の出居の事を申す」と。又、云はく、「昨日、左京権大夫道雅〈三位。〉、帯刀長高階順業の宅に到りて博戯す。（中略）関白、命せて云はく、『京兆の狂乱、更に言ふべからず。但し兼任の為す所、極めて不便なり。檢非違使に仰せて其の身を召さしめ札問すべし』てへり。禅閣、聞き給ひて涕泣す」と云々。又、云はく、「皇太后の御悩、猶ほ不快。御手足、腫れ給ふ由、女房の談ずる所」てへり。

信武、播磨・安芸の白丁各二人を隨身し、参り来たる。召して見る。

### 【現代語訳】

宰相中将が来て云ったことには、「昨日、左京さきょうの権大夫ごんのだいふ（藤原）道雅みちま〈三位〉が、帯刀長高階おびはきのおさたかしな順業のぶなりの宅のに到いたって、博戯はくぎを行いました。（中略）関白せきはくがおっしゃって云ったことには、『京兆きやうてうの狂乱きやうらんは、まったく言うに足りない。但し兼任けんじんの行なったところは、極めて便宜べんぎのないものである。検非違使けんひゐしに命じて、その身を召まさせてきゆうもん糺問ていききゆうするように』ということでした。禪閣ぜんかくは聞かれて涕泣ていききゆうしました」と云うことだ。また、云ったことには、「皇太后すうたうごう（妍子）の御病悩ごびやうなうは、まだ不快ふかいです。御手足ごてしゆが腫はれられたということは、女房にようぼうが談だんったところところです」ということだ。

信武は、播磨・安芸の白丁各二人を隨身して、参って来た。召して見た。

### 【9 / 7】

（中略）今暁、皇太后、今南に渡り給ふ。供奉の人、歩行す。法成寺と最近たるに依るか。中将、来たりて云はく、「宮の御心地、頗る宜しく御坐す。今日より維摩経を講ぜらる」と。又、云はく、「明日の定、参入すべからず。召使、更に来たり告げず」てへり。外記頼言の申す所、相違す。傾奇するのみ。又、云はく、「内の夜御殿の戸、人無く、猛く閉づ。女房、云はく、『人の足音有り。夜御殿に入りて戸を引き立つ。驚き見るに人無し』と。守道・文高を以て占はしめ給ふ。御葉・火事の由を勸申す。『重く慎しみ給ふべし』てへり。御物忌、十一日に当たる。仍りて行幸、停止す。当時、未だ十一日の神事に臨御せず。又、神今食、未だ神嘉殿に御さず」と云々。

### 【現代語訳】

今朝、皇太后（妍子）は、今南第に渡御された。供奉した人は歩行した。法成寺と至近であるからであろうか。中将が来て云ったことには、「宮の御病状は、頗る宜しくいらっしゃいます。今日から維摩経を講じられます」と。また、云ったことには、「明日の陣定は、参入することができません。

召使が更に来て、告げません」ということだ。外記頼言が申したことは、相違している。傾き怪しむばかりである。また、云ったことには、「内裏うちの夜御殿の戸が、人もいないのに、猛々しく閉じました。女房が云ったことには、『人の足音がしました。夜御殿に入って、戸を引き立てました。驚いて見ても、人はいませんでした』と（賀茂）守道と（惟宗）文高に命じて占うわせられました。後一条天皇の御病悩と火事について勸申しました。『重く慎まれなければなりません』ということでした。御物忌は十一日に当たっています。そこで行幸は停止となりました。当時（後一条天皇）は未だ十一日の神事に臨御していません。また神今食では、未だ神嘉殿に渡御されていません」と云うことだ。

### 【12 / 17】

十七日、癸未。諷誦を三个寺<東寺・清水・祇園>に修す。

節会の有無の例、勸申すべき事、大外記頼隆真人に仰す。

法成寺に参る。左兵衛督、車後に乗る。中将並びに資房、別の車にて相従ふ。藤宰相を招き出だし、消息を関白に達す。左兵衛督を以て、女院の女房に触る。余、西門の内に佇立す。二后、中門の北腋の土殿に坐す。仍りて中門の辺りに進まず。関白の御返事を聞き、即ち帰る。故按察大納言の後家を弔ふ。永輔朝臣を使はず。

昨の開闔、多く数日を経。三个日、之を以て限りと為す。永祚の例に依りて行なはるるか。「彼の例、縦横に云々するに依りて、数日に及ぶ」と云々。

### 【現代語訳】

諷誦を三箇寺（東寺・清水寺・祇園社）に修した。節会の有無の例を勸申する事を、大外記頼隆真人に命じた。法成寺に参った。左兵衛督は車後に乗った。中将および資房は、別の車で従った。宰相を招き出して、書状を関白に伝えた。左兵衛督を介して、女院の女房に告げた。私は西門の内に佇立した。二后（彰子・藤原威子）は、中門の北腋の土殿にいらっしゃった。そこで中門の辺り

に進まなかった。関白の御返事を聞いて、すぐに帰った。故按察大納言の後家ごけを弔問した。永輔朝臣を遣わした。昨日の開関は、多く数日を経た。三箇日を期限とした。永祚の例によって行われたのか。「あの例は、あれこれ云々していたので、数日に及んだ」と云うことだ。

以上が1027年において、『小右記』に見られる「女房」の記述である。

まず、[2/25]を見る。ここの「女房に告げるよう、資高すけたか（藤原資高 実資の養子）の許に仰せ遣わした。」「女房に伝え示しておきました。」という部分だが、この女房は東宮・敦良親王の女房であることは分かるが、紫式部だとは到底言えない。ただ、近くにいた女房が取り次いだということだろう。

次に、[2/28]を見る。ここも敦良親王のもとへ参上し、朝臣を介して女房が伝えたところから、紫式部ではない。取次として対応してくれただけで、それほど書くことではなかったと考えても良いだろう。

続けて、[4/20]はどうだろうか。「齋院に伺候する女房が、密かに告げて送ってきたところで。そこで故障を申しました。」というところから、齋院の女房であるため、紫式部ではないと分かり、この記述は考察しなくて良い。

次に[7/19]である。「皇太后（妍子）の御病悩は、まだ不快です。御手足が腫れられたということは女房が談ったところです」とあり、藤原妍子の女房ということで紫式部の可能性は低いと言える。病気であるため、妍子に直接仕えた女房が対応していると考えた方が良い。

[9/7]はどうだろうか。内裏での怪異についての話しで、夜御殿という限られた人しか出入りしない場所でのでき事である。「内裏の夜御殿の戸が、人もいないのに、猛々しく閉じました。女房が云ったことには、『人の足音がしました。夜御殿に入って、戸を引き立てました。驚いて見ても、人はいませんでした』と。」とある。後一条天皇に直接仕え、かつ夜に使う部屋の世話ができる女房ということで、紫式部の可能性は低いと言える。

最後に[12/17]を見る。ここも、「女院の女房に告げた」とあるだけで、これだけでは、紫式

部がと取り次いだのかは判断できない。だが、二后（藤原彰子・威子）がいることを考えると、紫式部がいるとも想像できる。

これまでのように、紫式部だと確定できる記述はないため、1027年に生存していたという説は考え直す必要がある。

さて、倉本一宏氏の説に戻りたいと思う。1027年に紫式部が取り次ぎの女房として出仕していたという説である。

根拠として、紫式部と伊勢大輔のやり取りを挙げています。二人は女院（彰子）の御料に、燈明を奉獻し、紫式部が伊勢大輔に歌を贈っている。

心ざし 君にかかぐる ともし火の  
おなじひかりに あふがうれしき  
（同じ思いを抱いて、院のために同じ御燈火を奉り、あなたに会って一緒に院の快復を祈願できたのはうれしいことです）

そして、この後にまた歌を贈っている。

おく山の まつばにこほる ゆきよりも  
我がみよにふる 程ぞはかなき  
（人里離れた深山に生える松の葉の上に氷る雪はやがて消えるものですが、その雪よりも、わたしがこの世に生きている時間は、はかないものです）

これを紫式部が死期を悟ったのだと解釈することも可能だが、浄土信仰に傾倒していた紫式部は、このような無常観を詠むことは自然であったと見ることができるとしている。また、彰子が女院となったのは1026年1月19日であるため、「院」というのが後の記述でなければ、それ以降の紫式部の生存は考えられると述べている。だが、やはり結論として死亡年は不明としている。

ここで注目したい点がある。『伊勢大輔集』（新編国歌大観第七巻32-11）の詞書には「和泉式部、院（彰子）にまるりてはじめたるよ」<sup>ii</sup>とあるが、和泉式部が彰子に初めて出仕したのは1009年頃<sup>iii</sup>で彰子が女院になる前である。つまり、『伊勢大輔集』を作成した当時の呼称が院だと分かるため、和歌が作られた年代をこの呼称から推測す

ることは困難だと言える。

これまでの説を整理すると、不明点はあるが、1014年から1019年は彰子に仕えたと推測される。1019年から1027年は、『小右記』にある取り次ぎの女房を紫式部と確定することはできないと思う。あくまで、予想の範疇であったとすべきだろう。

### 第三章 『源氏物語』に残したメッセージ

#### 第一節 葵の上の死と六条の御息所

紫式部が『源氏物語』を通して伝えたかった事とは何だろうか。これについては、紫式部自身が明言している訳でもなく、何かしらのメッセージがあったと私達現代人が想像しているに過ぎないことだが、同作品は女性の生き方や、人生の儚さ、正しく生きることの難しさを描き、ただの恋愛小説以上の思想があるように思われる。

本章では『源氏物語』からそのように考えられる場面を取り上げ、紫式部はどのような気持ちで書いたのか考察したい。注目する点として、登場する女性達の人生をまとめて、幸せな生活ばかりでなかった生涯を取り上げたい。ここでは葵の上、空蝉、紫の上に着目する。

古文は『新編 日本古典文学全集』を、現代語訳は角田光代氏の『日本文学全集 源氏物語』を使用する。

まず、葵の上を見ていきたい。葵の上は、光源氏の正妻で光源氏よりも四才年上である。最初は、元々入内する予定であったため、それが叶わず光源氏に対し冷たく接していたが、夕霧を出産し六条の御息所の生霊が取り付いて急死する。ここでは、妊娠が分かるまで男女関係があったことが作中で書かれていないことについて考察したい。

次の場面は、光源氏が若紫を引き取った後、その噂が葵の上に届いた時、葵の上は不満に思うが光源氏は、葵の上をいつかは理解し合える仲になると信頼していると分かる場面である。

宮は、そのころまかたまひぬれば、例の、隙もやとうかがひ歩きたまふを事にて、大殿には騒がれたまふ。いとど、かの若草尋ねとりたまひてしを、「二条院には人迎へたまふ

なり」と人の聞こえければ、いと心づきなしと思いたり。うちうちのありさまは知りたまはず、さも思さむはことわりなれど、心うつくしく例の人のやうに恨みのたまはば、我もうらなくうち語りて慰めきこえてんものを、思はずにのみとりないたまふ心づきなさに、さもあるまじきさびごととも出で来るぞかし、人の御ありさまの、かたほに、そのことの飽かぬとおぼゆる疵もなし、人よりさきに見たてまつりそめてしかば、あはれにやむごとなく思ひきこゆる心をも知りたまはぬほどこそあらめ、つひには思しなほされなむと、おだしく軽々しからぬ御心のほどもおのづからと、頼まるる方はことなりけり。

(『源氏物語』①「紅葉賀」316頁)

#### 【現代語訳】

藤壺の宮は、その頃退出して実家にいたので、例によって光君は逢える機会はないものかと様子をうかがいまわっていて、左大臣家からは不興をかけていた。その上、引き取った少女のことを、「二条院ではだれか女を迎えになったそうです。」などと言う女房がいて、葵の上は不愉快きわまりない。

それを知って光君は思う。こちらの事情は知らないのだからそんなふうには思うのは無理もない。ならば素直に、ふつうの女君のように恨み言でも言ってくれば、私も腹を割って話して、なぐさめることもできるのに。それをおかしなふうには勘ぐってばかりいるのだから、こちらだっておもしろくはないし、つい浮気心も抱いてしまうのだ。姫君には、ここは不足でここが不満だなどという欠点は何もない。何よりはじめに結婚した人なのだから、いとしくたいせつに思っている。その気持ちを今はわかってくれなくても、いつかはきくとわかってくれるだろう。

光君は、葵の上を落ち着いた分別のある女君として、格別に信頼しているのである。

「おだしく軽々しからぬ御心のほどもおのづからと、頼まるる方はことなりけり。」とあるように、光源氏は冷たい妻だと思いつつも、特別な女性だと思っていると分かる。その後も、葵の上

が妊娠した際にもずっと心配している様子が描かれている。

この前述の本文は「紅葉賀」のものであるが、この後の『花宴』と『葵』の出産のシーンまでは葵の上との男女関係がない。『花宴』の時、光源氏が20歳、『葵』の妊娠が分かった時、光源氏は22歳となっており、その二つの章の間は少し期間が空くため、その時に関係を持ったという設定にしようと紫式部は考えたのだろうか。

なぜ男女関係を書かなかったのかという点では、葵の上が光源氏の誘いを受け入れる話を書きたくなかったという考察や、急に子供がいる設定にしたいと考えたとすることなど多くの予想ができる。また、葵の上は政略結婚をして、光源氏を愛してはいないが後継者や子孫を残さなければという、当時の女性の努めを考えた出産だったのかもしれない。

彰子中宮の境遇で考えたい。彰子は12歳で入内し、同じく激動の政権の中で入内し政略結婚した女性である。一方で葵の上は14歳で結婚している。このように彰子をモデルとして葵の上を書いていたとも考えられる。

そうした政略結婚が予想されるが、出産直後、体調を崩している場面では台詞はないが、光源氏が葵の上を愛おしく思っていて、葵の上もいつもと違って光源氏を見送る様子がうかがえる。次はその場面を見ていきたい。

いとをかしげなる人の、いたう弱りそこなはれて、あるかなさかの気色にて臥したまへるさま、いとらうたげに心苦しげなり。御髪の乱れたる筋もなくはらはらとかかれる枕のほどありがたきまで見ゆれば、年ごろ何ごとを飽かぬことありて思ひつらむと、あやしきまでうちまもられたまふ。「院などに参りて、いととうまかでなむ。かやうにて、おぼつかなからず見たてまつらばうれしかるべきを、宮のつとおはするに、心地なくやとつみて過ぐしつるも苦しきを、なほやうやう心強く思しなして、例の御座所にこそ。あまり若くもてなしたまへば、かたへは、かくものしたまふぞ」など聞こえおきたまひて、いとときよげにうち装束きて出でたまふを、常よりは

目とどめて見出して臥したまへり。

(『源氏物語』②「葵」44～45頁)

### 【現代語訳】

楚々としてうつくしい女君が、ひどく衰弱し、やつれて、生きているのか確信できないほどの様子で臥せているのは、いじらしく、痛々しく感じられる。ひと筋として乱れることなく、はらりと枕を覆う髪は、この世に類を見ないほどのうつくしさに思え、この人を妻に娶って十年もの歳月、この人のいったいどこに不足があると思っていたのだろうと、不思議な気持ちで光君は葵の上を見つめる。

「院の御所に参りますが、すぐに退出してきます。こんなふうには、ずっと近くにいられたらうれしいのだけれど、母宮がそばにいらっしゃるから、とずっと遠慮していたんだ。それもずいぶんつらいものだ。だから少しずつ元気を取り戻して、いつもの部屋に移っておくれ。子どものように甘えているから、こんなにいつまでもよくなるのだよ」

そんなふうにして、見目麗しく装束を着た光君が出ているのを、葵の上は、いつもとは異なり、臥せったままじっと見つめて見送っている。

葵の上が亡くなる直前の場面であるが、二人が分かり合えたかのような場面のように読み取ることができる。この時点で葵の上は亡くなっており、六条の御息所が乗り移って見送っていたと解釈されることもある<sup>iv</sup>が、どうだろうか。実際、葵の上の台詞は全くないし、光源氏が愛情をもって接しているということだけが分かって読み解くことは難解であるが、紫式部は、幸せな結末を葵の上にと与えたのだろうか。

### 第二節 空蟬の揺るがない思い

この節では空蟬を見ていきたい。空蟬は伊予国の国守、伊予介の後妻である。元々宮仕えとなる予定であったが、父が亡くなり後ろ盾が無くなった女性として描かれる。光源氏は、紀伊守の別邸を訪れこのことを聞き、興味が湧き空蟬の寝室に入るが、最初の夜以降は空蟬は男女関係を持つことを拒む。

光源氏はそれでもあきらめきれず、空蟬の弟である小君を介して空蟬と連絡を取って関係を持つとしますが、上手くいかず再び寢室に侵入した際には、空蟬は小袿を脱ぎ捨てて逃げてしまう。ここでは、光源氏の誘いを断る空蟬の思いを取り上げる。

御文は常にあり。されど、この子もいと幼し、心よりほかに散りもせば軽々しき名さへとり添へむ身のおぼえを、いとつきなかるべく思へば、めでたきこともわが身からこそと思ひて、うちとけたる御答へも聞こえず。ほのかなりし御けはひありさまは、げになべてにやはと、思ひ出できこえぬにはあらねど、をかしきさまを見えたてまつりても何にかはなるべきなど思ひ返すなりけり。

〔源氏物語〕①「帚木」108～109頁

### 【現代語訳】

女の元には、光君からの手紙がしょっちゅう届く。女は思う。手紙を持ってくる弟はまだ幼いし、本人がいくら気をつけていても、手紙を人に見られでもしたら、軽率な女という評判まで背負いこむことになる。受領の妻などという私の境遇には、あのお方の愛情などまったく分不相応なのだ。どんなにすばらしいできごとであっても、結局は、受け取る側の身分次第だ。そう考えて、女は気を許した返事を書くこともない。あの夜、ほのかに見た光君の姿は、噂に違わず信じられないようなうつくしさだったと思ひ出さずにはいられなかったが、受け取った手紙に應えるような手紙を書いたところはどうなるものでもあるまい、と考へなおすのだった。

「めでたきこともわが身からこそと思ひて、うちとけたる御答へも聞こえず。」は空蟬の心情をよく表した場面だと思ふ。空蟬自身、衛門督の娘として、宮仕えになればそれ相応の暮らしができたかもしれないのである。だが受領階級の身分となってしまったことをここで嘆いているのだろう。

そうした中で最後まで光源氏の誘いを断った空蟬は、紫式部のどのような思いから書かれた人物だったのだろうか。紫式部は、こうした受領階級の暮らしを良く知っていたはずである。空蟬と比

較するなら、紫式部は女房として出仕できて、空蟬は受領階級に階級としては落ちたことになる。

空蟬のような芯の強い女性、男性の誘いに簡単に乗らない女性を描きたかったとも考えられるし、紫式部が内裏に出仕したように、中流貴族でも華やかな生活に進む道はあるということを書いてみたかったのかもしれない。

### 第三節 紫の上が思う女性の在り方とは

次に、紫の上が光源氏と初めて男女関係になった日について考察する。この場面では光源氏は完全に紫の上を一人の女性として見ていて、関係性をもっと発展させたいと考えているところである。だが、夜に関係を持った次の日の朝には紫の上はひどく傷つき、光源氏と口も利かないようになっている。

いとつれづれにながめがちなれど、何となき御歩ありきもものうく思しなられて思しも立たれず。姫君の何ごともあらまほしうととのひはてて、いとめでたうのみ見えたまふを、似げなからぬほどにはた見なしたまへれば、気色ばみたることなど、をりをり聞こえ試みたまへど、見も知りたまはぬ気色なり。つれづれなるままに、ただこなたにて碁打ち、偏つきなどしつづ日を暮らしたまふに、心ばへのらうらうじく愛敬づき、はかなき戯れごとの中にもうつくしき筋をし出でたまへば、思し放ちたる年月こそ、たださる方のらうたさのみはありつれ、忍びがたくなりて、心苦しけれど、いかがありけむ、人のけぢめ見たてまつり分くべき御仲にもあらぬに、男君はとく起きたまひて、女君はさらに起きたまあしたはぬ朝あり。人々、「いかなればかくおはしますならむ。御心地の例ならず思さるるにや」と見たてまつり嘆くに、君は渡りたまふとて、御硯の箱を御帳の内にさし入れておはしにけり。人間に、からうじて頭もたげたまへるに、ひき結びたる文御枕のもとにあり。何心もなくひき開けて見たまへば、

あやなくも隔てけるかな夜を重ねさすがに馴れし夜の衣を

と書きすさびたまへるやうなり。かかる御心

おはすらむとはかけても思しよらざりしかば、などてかう心憂かりける御心をうらなく頼もしきものに思ひきこえけむ、とあさましう思さる。昼つ方渡りたまひて、「なやましげにしたまふらむはいかなる御心地ぞ。今日は碁も打たでさうごうしや」とてのぞきたまへば、いよいよ御衣ひき被きて臥したまへり。人々は退きつつさぶらへば、寄りたまひて、「などかくいぶせき御もてなしぞ。思ひの外に心憂くこそおはしけれな。人もいかにあやしと思ふらむ」とて、御衾をひきやりたまへれば、汗におし漬して、額髪もいたう濡れたまへり。「あな、うたて。これはいとゆゆしきわごぞよ」とて、よろづにこしらへきこえたまへど、まことにいとつらしと思ひたまひて、つゆの御答へもしたまはず。「よしよし。さらに見えたてまつらじ。いと恥づかし」などと怨じたまひて、御硯あけて見たまへど物もなければ、若の御ありさまや、とらうたく見たてまつりたまひて、日ひと日入りゐて慰めきこえたまへど、解けがたき御気色いとどらうたげなり。

(『源氏物語』②「葵」69～72頁)

### 【現代語訳】

光君は、もの思いにふけることが多くなり、忍び歩きもだんだん億劫になって、出かけようともしない。紫の姫君は何もかも理想的に育ち、女性としてもみごとに一人前に思えるので、そろそろ男女の契りを結んでも問題はないのではないかと思った光君は、結婚を匂わすようなことをあれこれと話してみるが、紫の姫君はさっぱりわからない様子である。

することもなく、光君は西の対で碁を打ったり、文字遊びをしたりして日を過ごしている。利発で愛嬌のある紫の姫君は、なんでもない遊びをしていても筋がよく、かわいらしいことをしてみせる。まだ子どもだと思っていたこれまでの日々は、ただあどけないかわいさだけを感じていたが、今はもうこらえることができなくなった光君は、心苦しく思いながらも…。

いったい何があったのか、いつもいっしょにいる二人なので、はた目にはいつから夫婦という関

係になったのかわからないのではあるが、男君が先に起きたのに、女君いっこうに起きてこない朝がある。

「どうなさったのかしら。ご気分がよろしくないのかしら」と女房が心配して言い合っていると、光君は東の対に戻ろうとして、硯箱を几帳の中に差し入れていった。近くに女房がいない時に、女君がようやく頭を上げると、枕元に引き結んだ手紙がある。何気なく開いてみると、

あやなくも隔てけるかな夜をかさねさすがに馴れし夜の衣を

(どうして今まで夜をともしなかつたのかわからない。幾夜も幾夜も夜の衣をともしてきた私たちなのに)

とさりりと書いてある。光君が、あんなことをするような心を持っていると紫の女君は今まで思いもしなかつた。あんないやらしい人をどうして疑うことなく信じ切ってきたのかと、情けない気持ちでいっぱいになる。

昼近くになって光君は西の対にやってきた。

「気分が悪いそうだけれど、どんな具合ですか。今日は碁も打たないで、退屈だなあ」と言って几帳をのぞくと、女君は着物を引きかぶって寝たままだ。女房たちがみな離れて控えているので、女君に近づいて、光君は言う。「どうしてそんなに私を嫌がるの。思いの外、冷たい方だったのですね。女房たちも何かおかしいと思いますよ。」と、引きかぶった着物をはがすと、女君はひどく汗をかいていて、額の髪も濡れている。「おやおや、これはよくない。たいへんなことだ」と、何かと機嫌をとってみるが、心から傷ついている女君は一言も言わず黙りこんでいる。「わかったよ。もう二度とお目に掛かりません。恥ずかしい思いをするだけだから」

光君は恨み言を言って硯箱を開けるが、返歌はない。まるっきり子どもではないかといとしく思え、一日じゅう御帳台の中にこもってなぐさめるけど、女君の機嫌はいっこうになおらない。そんなことも光君にはかわいらしく思える。

光源氏は紫の上を本当に大切に思っており、性暴力ではなかつたと思われるが、紫の上からしてみれば、それまで兄のように優しくかつた光源氏が、

人が変わったように男女関係を持つようとしてきたため、怖くて口も利きたくなかったのではないかと読むことができる。

だが、この後では紫の上は、貞淑な妻として亡くなるまで光源氏と暮らしている。これはキャラクターの成長として描かれているのか、設定を変更して、あどけなく女の子らしい性格から女性らしい性格として書くようにしたのか、はたまた設定上のミスなのか疑問点が挙げられる。

私は、これについて紫の上の成長だと考える。この初めて性的関係を持った日は怖くて、話したくないと思っていたが、この後、桐壺院が亡くなったたり、藤壺の宮が出家したり、明石に流されたりすることで辛い思いをした光源氏をそばで見て、支えたいと思い、そこから性格も成長したのではないだろうか。また、その後の明石の上や朝顔の君など他の女性関係にも頭を悩ませる日々が続く、紫の上自身もそのような光源氏を受け入れていたのではないかと思う。

紫の上は物語上の女性達の中でも、藤壺の宮と合わせて最重要人物と言っても過言ではないと思う。幼少期から光源氏と出会い、妻となり出家の願いも叶わず亡くなるという一生を、物語全体を通して描かれている。紫式部が紫の上にとずっと焦点を当てていたと考えるべきだが、だとすれば、紫式部は幸せでない女性を最初から最後まで書きたかったということになる。

もう一つ、紫の上に関わる場面を見ていきたい。「夕霧」より、夕霧が女二の宮と恋仲になることで、妻の雲居の雁と関係がこじれ、それを心配する光源氏と紫の上が登場する場面である。私は、この場面で紫の上が自分自身の人生を思い返し、生きづらい世の中だと嘆く台詞が印象的で、紫式部がどのような気持ちで書いたのか興味を持った。

六条院にも聞こしめして、いとおとなしうよろづを思ひしづめ、人の譏りどころなく、めやすくて過ぐしたまふを、面だたしう、わがいにしへ、すこしあざればみ、あだなる名をとりたまうし面起こしに、うれしう思しわたるを、いとほしう、いづ方にも心苦しきことのあるべきこと、さし離れたる仲らひにてだにあらで、大臣などもいかに思ひたまはむ、

さばかりのことたどらぬにはあらじ、宿世といふものがれわびぬることなり、ともかくも口入るべきことならず、と思す。女のための方にこそいづ方にもいとほしけれとあひなく聞こしめし嘆く。紫の上にも、来し方行く先のこと思し出でつつ、かうやうの例を聞くにつけても、亡からむ後、うしろめたう思ひきこゆるさまをのたまへば、御顔うち赤めて、心憂く、さまで後らかしたまふべきにや、と思したり。女ばかり、身をもてなすさまもところせう、あはれなるべきものはなし、もののあはれ、をりをかしきことを見知らぬさまにひき入り沈みなどすれば、何につけてか、世に経るはえはえしさも、常なき世のつれづれをも慰むべきぞは、おほかたものの心を知らず、言ふかひなき者にならひたらむも、生ほしたてけむ親も、いと口惜しかるべきものにはあらずや、心のみ籠めて、無言太子とか、小法師ばらの悲しきことにする昔のたとひのやうに、あしき事よき事を思ひ知りながら埋もれなむも言ふかひなし、わが心ながらも、よきほどにはいかでたもつべきぞ、と思しめぐらすも、今はただ女一の宮の御ためなり。

〔源氏物語〕④「夕霧」455～457頁

### 【現代語訳】

六条院の光君もこの噂を耳にした。「大将はものごとわかまえがあり、何ごとにおいても冷静で、人の非難を受けることもなく無難に今まで過ごしてきて、それが親としても誇らしかった。私は若い頃に少しばかり色恋にかまけて、浮き名を流してしまったが、その面目も立つというものかどうかうれしく思っていたのだが、困ったことだ、どちらの方々にとっても心苦しいことになろう。致仕の大臣と大将は、伯父と甥という遠からぬ関係だし、大臣がどう思うだろう。この程度のことが大将にわからないはずはないが、しかし宿世とは逃れようのないもの、どうこうと口出しできるようなことではないし……」と思う。ただ女の身を見ると、宮も、また大将の妻（雲居雁）も、どちらも気の毒なことだと、よそながらこの話を聞いて嘆いている。

紫の上にも、これまでのこと、この先のことを

思いながら、こうした話を聞くにつけ自分が亡くなった後のことが気掛かりだと話す。紫の上は顔をぱっと赤らめて、情けない、そんなに長く私を後に残すおつもりなのか、と思っている。「女ほど、身の振りが窮屈でかわいそうなものはない。うつくしいものに心動かされたり、折々の風雅を味わったり、そういうことを何もわからないかのように引きこもっておとなしくしていたら、いったいどうやってこの世に生きる喜びを味わい、無常の世のむなしさを忘れてたりできるというのだろう。おおよそ世の中のこともわからない、何もできない女になってしまったら、せっかく育て上げた親だってひどく不本意だと思うに違いない。心にじっとおさめて、十三歳になるまでものを言わなかった無言太子—小法師たちが無言行のつらい修行の時に引き合いに出す昔話の人みたいに、悪いこととよいことのけじめをわかっていながら黙っているなんて、生きる甲斐もないではないか。私自身、ほどよく生きていくにはどうしたらいいのだろうか」と思いめぐらせているのも、今はただ、明石の女が産んだ女一の宮の育て方を思っていることである。

この場面では、女性の生き方を紫の上が語っている。女性は、身の振りが窮屈でただ大人しくしていて、自分の気持ちが言えない生き方しかできないのかという考えを、紫式部が持っていたとしたらどうなるだろう。紫式部は結婚し、子供も生まれたが、夫に先立たれ、宮中では悩みの多かった彰子を見てきた。そうしたなかで、『源氏物語』の終盤を書くに至ってこの思想が出たとも言えるのではないだろうか。

現代で言い換えれば、小説の中で、深窓の姫君が外の世界を知らないまま過ごし、外に出たいと言っても許されない。だがそれに対し葛藤するということに変換することができる。1000年前からこの思想があったとすると、あまりにも長い歴史の中で女性の在り方は変わらなかったと言える。今でこそ、女性進出の考え方が出てきたが、その社会を紫式部たちは望んでいたのだろうか。

この時代は、紫式部以外にも清少納言や赤染衛門、藤原道綱母など多くの女性作家が活躍した時代でもある。その女性たちが、それぞれの思いを

書くことができたという歴史的な進歩と見るべきなのだろう。

『源氏物語』に登場する人々は、どうして不幸な結末を迎えることが多いのか疑問に思う人は多いと思う。私も原文を読んだり、本稿で論述したりする中で、同じように疑問に思った。私は今回調査する中で、紫式部は人間の善良な部分と、悪い部分を描いて、人間の本質を書きたかったのではないかと思った。

例えば、光源氏は紫の上を幼少期は大切に育てていたが、紫の上がある程度の年齢になると結局は男女関係を結んでしまう。他にも、葵の上はいつまでも光源氏を無視していたが、亡くなる直前になると、光源氏を見つめて見送っている。前述した、六条の御息所との関係性をもし考えないのであれば、葵の上の冷たさが次第に解けて、光源氏と分かり合えたというように、最初は悪い点、最期に良い点を書いているのではないだろうか。人間は完璧には生きられない、間違えながら人生を歩むということを登場人物を通して言っているのかもしれない。

一方で、空蝉は、作中で一貫して葛藤を見せていると私は思う。もちろん、光源氏からの誘いを断ったり、伊予介に後ろめたい気持ちがあったりして、はっきりしている部分もある。だが、空蝉が手紙を送る場面もあるように、完全な無視はしておらず、伊予介の死後出家した後にも光源氏と会っている。他の女性達のような深い恋愛関係にならなくても、空蝉は倫理的に考えた女性であると言えるだろう。

紫の上も、光源氏の女性関係に悩みながらも、光源氏からの愛情を受け、幸せに感じていて、血のつながりのない明石の中宮を本当の娘のように育て上げている。

このように人間は多くの事を経験していく中で、辛いこともあるが、幸せを求めて生きているということを書いたようにも思える。

## おわりに

本稿では、紫式部の生涯について取り上げ、晩年についても『小右記』などを参考に考察した。また、『源氏物語』を通して紫式部が伝えたかっ

た事に着目できた。

出仕した時期や、晩年、『源氏物語』の執筆時期については、確定できる根拠があった訳ではないが、紫式部の父や藤原道長との関係性を見ることで推測できるものはあったと思う。また、『源氏物語』のメッセージは、人間の完璧でないところをストーリー全体で描いた部分にあると思う。

第一章 第一節では、いつ『源氏物語』を書いたのかについて考察したが、先行研究を調査した中で疑問点を取り上げて、より支持できる説を論述することができた。紫式部が小さい子供を育てながら物語を書くことは無理があるという点に、無根拠だと述べることができたのは良かったと思う。また、使用する紙についても考えると強力な援助が必要であったと推測できる。

第二節では、女房になった経緯について『新編日本古典文学全集』などを踏まえて考察できた。彰子に仕えたのが初出仕と踏まえた上で、『紫式部日記』も合わせてみると、その日記の内容からやはり初めての仕事に取り組む姿勢がうかがえる。

第二章では、紫式部の晩年について着目した。1027年に紫式部が生存していたかを、疑問点として取り上げた。『小右記』を調査した結果、確実に紫式部がいたという確証は無かったため、やはり亡くなった年を絞り込むのは困難と言えらるう。

第三章では、『源氏物語』についてそのメッセージ性を見ることができた。第一節では、六条の御息所が葵の上に取り憑いていたのではないかという説や、彰子がモデルだったのではないかという説を考えることができた。どちらともとても興味深く、『源氏物語』は掘り下げれば掘り下げればほどおもしろいと実感できた。だか、読者としては、取り憑いていたのではなく、葵の上本人が見つめていたと読みたい願望もあると思う。ただ冷たいだけの女性より、可愛らしい部分がある方が良いと思う人が大半ではないだろうか。

第二節では、空蝉が光源氏を拒む場面から、空蝉の性格を考えた。本節で引用した原文の中では「めでたきことも我が身からこそと思ひて」は、印象深いセリフだと思う。身分社会を、低い身分の者がどう見ているかを表現した台詞だと思った。

普通に考えれば、夫がいる女性に近づいた光源氏は悪者で、空蝉の対応は間違っていないと読者も思うはずだが、ストーリー全体を見ると、不思議と空蝉が異質に感じてしまう。それは、光源氏と恋愛関係になった女性が多いからなのか、光源氏を主人公として見て、光源氏側の視点で読んでしまっているからなのか、各々の読者で意見が分かれるだろう。

第三節では、紫の上の苦悩について着目した。「女ばかり、身をもてなすさまとこそせう、あはれなるべきものはなし」は、私が『源氏物語』を読んでとても印象に残った台詞であるとともに、本稿で扱いたいと思った場面であるが、この台詞は紫の上がこれまでの自分の境遇を顧みて言ったのだと思う。正妻の子ではないため父親の愛を感じないまま育ち、光源氏と結ばれても光源氏の女性関係で悩ませられてしまう。自分の人生を振り返っても、女性はどう生きて良いか分からないと辛い気持ちを言っているのだろう。

紫式部や『源氏物語』について考察できたが、興味深い説が数多く考えられ、紫式部について少し迫ることができたと思う。彰子という中宮に仕え、『源氏物語』という秀作を残しながら、出仕時期や晩年についてはあまり記録が残されていないことが不思議ではあり、それが本稿で扱った理由にもなるが、まだ解明できていないという点でも魅力がある人物だと思った。

『源氏物語』では特に魅力的だと感じた登場人物に焦点を当てて、その人物を書いた意図を読み解くことができた。『源氏物語』は煌びやかな内裏生活だけでなく、人の一生分の苦悩や身分社会の生きづらさ、人を愛するというを描いた物語だと思った。

紫式部だけでなく、藤原道長や彰子についても掘り下げることができたら、『源氏物語』についてより理解が深められたと思うため、今後手に取って読む際にはその点を考慮しながら熟読するべきだろう。

これだけの大作に込められたメッセージをさらに読み解くことができたら、『源氏物語』を一層楽しく読むことができると私は思う。

## 【参考文献】

- ・今井源衛『人物叢書 新装版 紫式部』吉川弘文館、1966年3月30日
  - ・倉本一宏『紫式部と藤原道長』講談社現代新書、2023年9月20日
  - ・藤岡忠美 中野幸一 犬養廉 石井文夫『新編 日本古典文学全集 26 和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』小学館、1994年9月20日  
※紫式部日記のみ 中野幸一校注・訳
  - ・今井源衛(1982.11)「紫式部の晩年再考」『日本文学研究』18巻, 13-24頁
  - ・阿部秋生 秋山虔 今井源衛 鈴木日出男『新編 日本古典文学全集 20・源氏物語①』小学館、1994年3月1日
  - ・阿部秋生 秋山虔 今井源衛 鈴木日出男『新編 日本古典文学全集 21・源氏物語②』小学館、1995年1月10日
  - ・角田光代『池澤夏樹=個人編集 日本文学全集 04 源氏物語 上』河出書房新社、2017年9月20日
  - ・角田光代『池澤夏樹=個人編集 日本文学全集 05 源氏物語 中』河出書房新社、2018年11月20日
  - ・国際日本文化研究センター。「撰関期古記録データベース」. 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構. <https://rakusai.nichibun.ac.jp/kokiroku/index.php>. (参照 2024. 11. 26)
  - ・倉本一宏『現代語訳 小右記 14 千古の婚儀 頓挫』吉川弘文館、2022年4月20日
  - ・倉本一宏『現代語訳 小右記 15 道長薨去』吉川弘文館、2022年10月20日
- i 伊井春樹『人がつなぐ源氏物語 藤原定家の写本からたどる物語の千年』朝日新聞出版、2021年2月25日
- ii 「新編国歌大観」編集委員会『新編国歌大観第七巻 私家集編Ⅲ 歌集』角川書店、1989年、4月10日  
※32伊勢大輔集99頁11の詞書より
- iii 「和泉式部」(ジャパンナレッジ『日本大百科全書(ニッポニカ)』)
- iv 室伏信助 上原作和『人物で読む『源氏物語』第五巻一葵の上・空蟬』勉誠出版株式会社、

2005年11月10日

※239頁 太田敦子「葵上の最後のまなざし  
—「葵」巻の死をめぐる表現機構—」